
10 ヒース

夏になると、スコットランドの山々は、ピンクのヒースにつつまれる。スコットランドだけで、2万ヘクタールの土地がヒースにおおわれているというから、かなりのものだ。しかし、逆にいえば、それだけ農耕に適さない土地が広がっていることになる。

ヒースは、『嵐が丘』などで日本人にも知られているが、実物を見る機会はあまりないかもしれない。最近では日本でも、エリカやカルーナの名前で、園芸店でも売られているが、イギリス産のものはあまり見かけない。普通は、膝あたりまでの高さの、常緑の灌木である。ムアとよばれる荒野に一面に生え、枯れ落ちた葉や枝は、何千年ものあいだ、たまりにたまって、ピートを形成する。ピートは、スコップで煉瓦のような形に切り取り、乾燥させて燃料に使用するほか、最近では園芸の需要が多い。日本にはそのままの形では輸入できないので、乾燥させてピート・モスとして売られている。ピートの需要が多くなって、自然破壊が進んでいるという声があるが、日本人も知らないうちに自然破壊に手を貸しているのかもしれない。私の好きな種類は、ベル・ヒーザと呼ばれるもので、ホタルブクロをうんと小さくしたような形の、名前の通り鈴状の濃いピンクの花が咲く。栽培を試みているが、まだ花をたくさん咲かせるまでにはいたっていない。

一見するとあまり役に立ちそうにないヒースであるが、じつは古くからスコットランドの人々の生活を支えてきた。乾燥させて燃料とするほか、ヒース葺きの屋根になったり、縄になったりする。ヒース葺きの屋根は、百年はもったといわれ、縄も、つくっていた人によると、他のどんな縄より丈夫だという。オークニー諸島にあるスカラ・ブレ遺跡からも、紀元前2000年頃の縄が出土している。そのほか、箆やマットに利用されるなど、用途は数え切れない。若い芽はヒツジの良い餌になるほか、ヒースに住む昆虫は鳥などの餌となり、スコットランドの生き物たちの食物連鎖のもっとも重要な舞台を提供してきた。

アルコールの好きな方向けの話もある。イギリスでいちばん北のウイスキーの醸造所は、いまでも触れたオークニーにある。そのウイスキー、「ハイランド・



ヒースに覆われた丘陵 (1996 年撮影、著作権フリー)

パーク」は、これまでどこにおみやげでもって帰っても、幸い好評であった。イギリスでも、知人になにかよいウイスキーがあるかと聞くと、「ハイランド・パーク」はどうだ、という答えが返ってきたりする。自分で飲んでみても、たしかにおいしい。だが、その理由は、これまで知らなかった。

この醸造所には、「ヒース・ハウス」という木造の建物がある。そこに、7月に刈り取られたヒースが集められる。7月は、ヒースが満開の時期だ。そして、「ヒース・ハウス」で乾燥させたヒースは、燃えたピートの上に置かれ、モルトの乾燥を助けるとともに、独特の香りをつける。これが、あの「ハイランド・パーク」の独特の香りの理由だったのだ。ひとつ知識が増えたところで、ヒースの偉大な功績に、まずは、乾杯！

ところで、どちらかという土地味な植物ではあるが、ヒースのファンは少なくない。私も夏にスコットランドをドライブして、ヒースの魅力を知ってしまった一人だが、ネス湖の東50キロほどのところの、スペイサイド・ヒースセンターを運営する、デイビッド・ランビー氏の、ヒースに対するのめり込みはすごい。1972年にセンターを開設して以来、ヒースに関するあらゆる情報を集め



ヒースの花 (1996 年撮影、著作権フリー)

続け、今では年間10万人近い人々が訪れるまでになっている。これまでに書いたことも、氏の美しい本に負うところが多い。気候の違いで、日本でのヒースの栽培は、必ずしも簡単ではないが、工夫を続けたいと思っている。

1996 新納泉 著作権フリー

【Info】 オークニー諸島 Orkney Islands 58.984675, -2.960167
スペイサイド・ヒースセンター Speyside Heather Centre 57.283511, -3.695756